

シェリングの「アナーキズム」
——「代補」としての国家と「不気味なもの」——
中村徳仁（京都大学人間・環境学研究所博士課程）

これまでシェリングの哲学は、「ドイツ観念論」という言葉で一括りにされるフィヒテやヘーゲルと比べると、政治思想の文脈で論じられることが少なかった。しかし彼は、様々な著作のなかで断片的にはあるものの、法や政治にかんして少なからず言及している。本発表では、シェリングの築こうとした政治思想を再構成するための準備として、彼がそもそも「国家」をどのように捉えていたのかということに注目する。なかでも本発表が注目するのは、彼が国家を説明するにあたって用いた「代補 (Supplement)」という言葉である。

シェリングは主著の『超越論的観念論の体系』(1800年)のなかで、いかなる政治共同体にも先立つ個人の自由を尊重し、国家とはそうした自由が最大限に発揮されるための「代補」の装置にすぎないと主張した。ここには旧秩序の先にある自由の勝利にたいする期待が描かれている。ところが、それから10年後の『シュトゥットガルト私講義』においては、フランス革命の失敗が指摘され、「国家は人類に宿る呪いの帰結である」として決して逃れられないものと説明されている。ハーバーマスは「唯物論への移行における弁証法的観念論」(『理論と実践』所収)のなかで、シェリングのこうした変化に反動化の契機を見てとり、シェリングが「アナーキズム的性格」を強めたと非難する。

しかし、本発表ではむしろ、ハーバーマスの診断を別の角度から解釈する可能性を提示する。シェリングが一見政治変革を諦めたかにみえるのは、彼が絶えざる政治動乱のなかで、あらゆる秩序の根底にある「無底=無根拠 (Ungrund)」の次元を発見したからであった。彼は、何度も打ち倒されては立ち現れる「国家」という存在の「不気味な」性質を看取していたのだ。国家は、自由を実現するための補助的な道具に過ぎないはずが、人びとはいつしかそれに依存せざるをえない。彼が1800年の時点で直観的に記した「代補」という言葉には、自由と国家のあいだにあるそうした関係が示唆されている。

後にフロイトがシェリングから引用した「不気味なもの (das Unheimliche)」とは、秘匿されるべき「秘密」が突如明るみになることを意味する。ここでの文脈にひきつけられれば、その秘匿されるべき「秘密」とは、国家が支配を正当化するための「根拠」を最初から有していない、つまり「始まり (arche) がない (an-)」という意味での「アナーキー」であるということだ。つまり、ハーバーマスが批判的に述べたはずの「アナーキズム的性格」は、その意図を超えて、シェリング国家論の核心を言い当てていたのである。